

社長所感（29年4月）

桜が満開の頃となりました。

これから一月余り、日本列島の南から北へ、山すそから頂へ、ソメイヨシノから枝垂桜、八重桜へと移ろいながらいろんな桜を楽しむことができる訳で、本当にわが国は多様で多彩な自然に恵まれていると思います。

桜と言えば、アメリカの初代大統領のジョージ・ワシントンの逸話が思い出されます。

少年時代、いたずらで父親が大切にしていた桜の木を切ってしまいます。「誰がやったのだ。」と尋ねられ、「僕がやりました。」と正直に答えたところ、父親は怒るどころか、逆に、その正直さを高く評価したという話です。

この話、私が子供の頃（昭和30年代）、よく話題となっていたのですが、最近ほとんど聞かれなくなってしまいました。余りにも当たり前すぎて、今風のオチがないので、マスコミでも取り上げにくいからでしょうか。

その昭和30年代、正直は大きな徳とみなされており、「私は嘘は申しません。」と国会で明言した池田首相は、公約の『所得倍増』を計画を上回るスピードで達成しました。

さらに、「総理在任中は、大好きな待合いとゴルフ場には行かない。」と記者団に約束し、その約束を律儀に守ったと言われています。

また、昭和40年代になりますが、福田赳夫蔵相（現在の財務相と金融庁長官を併せたポスト）は、記者団から公定歩合の引き上げについて聞かれ、「頭の片隅にない。」と答えますが、その数日後に公定歩合を引き上げます。

騙されたと怒った記者達が、押っ取り刀で駆けつけると、福田蔵相「嘘はついていない。『頭の片隅にない。』と言ったろう。」と答え、これには、さすが強面の記者達も二の句がつけなかったと言います。

当時「公定歩合の上げ下げについては嘘をついても許される。（そうでないと、“チューリッヒの小鬼”と呼ばれる投機筋が暗躍して、国富が奪われるから）」とされていましたが、そんな中であっても、ギリギリのところで嘘を回避したという話です。

もっとも、こうした時代にも「誠心誠意 嘘をつく。」という迷言を残した政界の寝業師、三木武吉のような政治家もいましたが、彼らはトリック・スターであって、リーダーではありませんでした。

国民に約束したことは守ろう、自分の発言に正直であろうと努めていた池田首相、福田蔵相（後に首相）をリーダーに持った昭和30年代、40年代、思えば、わが国がもっとも輝いていた頃かも知れません。

こんな古い話を思い出したのも、昨今の国会や都議会の質疑や論議に、国民や都民に対して正直であろうという強い思いが感じられないからです。

嘘は、4月1日（エイプリルフール）に限定していただきたいと願うところです。